



Title	＜書評＞「ロビンソン・クルーソー」（デフォー著, みすず書房, 1,200円）
Author(s)	たくましきジョンブルTM
Citation	大阪公衆衛生. 1989, 56, p. 19-19
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/83685
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

書 評

『ロビンソン・クルーソー』

デフォー著（みすず書房 1,200円）

本書には、一人の男が無人島に漂着して、生き抜いていく過程が描かれています。ほとんど何も持たず漂着した男が、自分の乗っていた船が打ち上げられたのをみつけ、色々な物資を島に運び、生活の基盤をつくる。やがて野生の山羊をみつけ、これを家畜にしたり、ライ麦を種まきから始めてパンや酒をつくる。さらに別の難破船から、金貨や火薬をみつけ、オウムを飼いならしたりするなど、生活の不便さをほとんど感じさせないで物語は進行していきます。さらには、人喰い人種のえじきにされかかった黒人を助け、自分の従僕とし、そして、この黒人を捕らえにきた部族と一戦を交えるという、まさに典型的な冒険劇物です。

これが、日本人の難破漂流物だと、陰惨な、暗い物語になってしまう（吉村昭の「漂流」等）が、この作品はなんと明るいことか。

まるでゲームをやるかのように、難破を楽しんでいるんじゃないかと思えるくらいです。無人島というのは、絶対的な孤独の世界ですから、普通なら絶望感に打ちのめされ、自らの生を絶つところでしょうが、主人公はしたたかにかつたくましく生ききる。

この精神の強靱さは、大いに尊敬するに値するものです。

もしも、この主人公のような気質がいわゆる「ジョンブル」に多いのなら、イギリスがかつての大英帝国時代、世界を支配していた理由がわかるような気がします。

どんな悪条件でものりこえてみせるという創意工夫の心、これさえ持てば日常生活にあきてしまった人も、日々の生活に喜びを感じていけるかも知れません。

本書はともすれば、子供の本という印象をもたれていますが、日常性に埋没してしまった大人にぜひ読んでもらいたい一冊です。

（たくましきジョンブルTM）